

コスタリカにおける「エコツーリズム」 イメージの創造と近年の変化

たけだ じゅん
武田 淳 海外青年協力隊

The purpose of this paper is to explain the changes in the image of Costa Rican tourism. In 1990s, Costa Rica was known as one of the world's leading ecotourism destinations. However, since the 2000s, the image of the country's tourism declined. This is due to the large resort development projects on the Pacific coast in recent years, which run counter to the conventional ecotourism movement.

The country's tourism is related to various factors including the conservation policies of the government, Institute of Tourism, and citizens' and NGOs' National Trust Movement. While focusing on their efforts, I discuss the change in the tourism image.

1. はじめに

コスタリカは、豊富な自然を観光資源に、北米でのエコツーリズムマーケットを牽引してきた。20世紀半ばまで農業国であったこの国は、1980年代に観光業が勃興し、1990年代に飛躍的な成長を遂げた。2010年の外国人観光客数は210万人に及び¹、観光業は同国の基幹産業となっている。

コスタリカの観光商品やガイドブックには、「エコツーリズム」という接頭語が頻繁に使用され、そのイメージは既に定着した感があるが、近年、そうした状況に変化がみられている。太平洋沿岸地域を中心に大型リゾート開発が進み、新たな観光地が誕生しているのだが、こうした開発は、それまでのエコツーリズムの路線に逆行するものとして、一部の論客から批判的に論じられている(Haney, 2008)。こうした問題は、一般誌にも取り上げられている。例えば、ナショナル・ジオグラフィック・トラベラー誌が2009年に行った世界の観光地評価では、コスタリカは前回の調査(2004年)から評価を下げており、同誌によれば「エコツーリズムの本道に行くコスタリカの今回の評価は思いがけないものであ

った」とし、その低い評価の理由に「太平洋沿岸の大規模なリゾートの台頭」が挙げられている²。このように、ここ数年でコスタリカの観光のイメージに変化が現れているのだ。

筆者が注目しているのは、この大型リゾート開発の批判が、同国で盛んとされてきたエコツーリズムを参照して論じられていることである。それは大型リゾート開発の性格を浮き彫りにするための論法であるが、一方で、コスタリカにおいて「エコツーリズム」という言葉は非常に抽象的に使われてきた。もちろん、エコツーリズムという用語は、これまで先人たちによって、その定義が議論され、解釈が整理されてきたが(後述)、ここで着目するのは、一般にも広く流布している「エコツーリズム」という言葉だ。観光素材の大半を自然に依存しているコスタリカにおいては、自然を対象にした観光を一括りにして「エコツーリズム」と表現されることも少なくない。例えば、コスタリカ政府観光局は、ホームページ上で乗馬や登山などを含む自然の中で楽しむアクティビティを「エコツーリズム」として紹介している。大型リゾート開発批判を

したハニーも、この曖昧に表現されている用語を「エコツーリズム・イメージ(ecotourism image)」と表現し、イメージとしての「エコツーリズム」と現実のエコツーリズムと区別している(Haney, 2008)。

筆者の問題意識は、もし、多義的で曖昧に使われているこの言葉を、近年の大型リゾート開発との対比で語るならば、同時に、従来「エコツーリズム」と呼ばれてきたものの内実が改めて問われなければならないのではないか、ということである。

では、これまでコスタリカの「エコツーリズム」として論じられてきたものはどのような対象を指していたのだろうか。そもそも、エコツーリズムの定義とは、1)自然環境への負荷を最小限にすること、2)環境保全にかかわる体験や学習要素があること、3)当該社会へ対して経済的な便益があり、そのことによって保全活動の持続が期待されること、といった要素が含まれる観光形態であると整理されてきた(真板、2001、敷田・森繁、2001など)。また、同国で実践されている具体例としては、1)国土の26.21%を保護区として保全している政府の自然保護政策。2)政府観光局が、宿泊施

設や観光アクティビティに対して行っている環境評価(サステイナブル・ツーリズム認定制度など)。3)エコツーリズムの誘致を行っている市民団体やNGOなどによる市民活動、といった実践例が同国のエコツーリズムを支える要素として言及されてきた(Aylward et al. 1996, Rivera, 2002, Stem et al, 2003)。

以下では、上記に関する具体的な活動例を取り上げながら、従来のコスタリカの観光イメージが形成されていく過程でそれぞれが果たした役割を論じる。また、太平洋北部沿岸で起こっている大型リゾート開発を取り上げながら、この事象が同国の観光イメージに与えた変化について考察する。

2. 文化資源なきツーリズム

中米にコスタリカは、北はニカラグアに、南はパナマに接し、太平洋とカリブ海を跨ぐように立地している。中米諸国の観光資源としては、ユカタン半島からグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルにかけての一角に点在しているマヤの遺跡が有名である。これらの国には、先住民族の数も多く、観光地では民族文化に由来する民芸品が売られていたりする。同じ中米でも、これらの地域は文化遺産を観光の商品にしているのだが、コスタリカの場合には、ほとんど文化は観光資源になっていない。なぜならば、コスタリカの領土は、マヤ文明の周縁に位置しており、ピラミッドなどの遺跡もないからである。先住民族は、国内に8つの民族集団が生活しているが、人口比にするとコスタリカの総人口の約1%と極めて少なく、同国の社会の中ではマイノリティーである。加えて、民族文化の継承が危機に瀕している民族も多く、例えば、現存する8つの民族はそれぞれに固有の言語を有していたのだが、現在継承されているのは4つの民族集団に過ぎない³。こうした状況から、文化資源を取り入れた観光は盛り上がっていない。

現在、コスタリカの観光は自然を前面に押し出しているが、その背景には、同国が文化資源に乏しく、むしろ「自然しか宣伝材料がない」という事情がある。とはいえ、

単に自然があるだけで産業が成り立つわけではない。自然を観光の素材とするために、どのような取り組みが行われてきたのだろうか。

3. 増える自然保護区とその社会的意味の変化

コスタリカは、熱帯多雨林から熱帯乾燥林、熱帯雲霧林まで変化に富んだ植物相を有しており、それらは数多くの動物相の棲みかになっている。これらの自然が保護区として保全され、同時に観光の舞台となっている。自然保護を担当しているのは環境エネルギー通信省で、実際の保護区の管理は同省が管轄する国家自然保護区庁(Sistema Nacional de Áreas de Conservación)」という組織が行っている。1955年に最初の国立公園イラス火山国立公園(Parque Nacional Volcán Irazú)が出来て以来、保護区の数が増え続け、現在は166の自然保護区が国内に存在し、その面積は国土の26.21%に相当する⁴。これは国家自然保護区庁が管理している保護区の数であるが、その他に、個人や企業が保有している保護区があり、国内で保護されている土地の面積は相当数に上る。しかし、これらの全ての保護区に立ち入りができるわけではない。国家自然保護区庁は、保護区を自然環境や地域の特性から8のカテゴリーに

図-1 自然保護区のカテゴリー

カテゴリー	数	面積(ha)
国立公園	28	629,394
保護区	31	157,213
森林保護区	9	216,277
生物学的保護区	8	21,634
重点的保護区	2	1,355
野生動物保護区	71	237,553
湿地帯保護区	13	69,251
その他	4	21,811
合計	166	1,354,488

(国家自然保護庁のホームページを元に作成)

分類しており(図-1)、それぞれ区域内の利用に関する規定が設けられている。そのうち、一般に開放されているのは、国立公園とその他に区分されている一部の保護区だけである。

当然のことながら、自然保護区は生態系

の保護を目的としているが、そうした保護区の性格は時代と共に変化してきた。例えば、コスタリカの国立公園は、もともと観光地としての利用を想定したものであり、初期の頃に作られた公園は火山や海岸といった景勝地が対象にされている。しかし、1980年前後から、多くの動植物相が棲息する地域が公園化されるようになり、国立公園は「自然保護区」としての性格が強調されていく。つまり、保護区が持つ社会的な意味は、常に一定なわけではなく変化しているのだ。以下では具体的に1980年代以前と以後に作られた保護区の例を挙げながら、国立公園に起こった変化を見てみたい。

3-1. 1980年代以前：市民運動で出来上がった国立公園

マヌエルアントニオ国立公園(Parque Nacional Manuel Antonio)は、太平洋沿岸のビーチから森にかけての一角が保護されている国立公園で、ナマケモノやリスザルなどの動物観察ができるほか、公園内ののどかなビーチで海水浴も楽しめる(図2)。

図-2 本文中で登場する地名の位置関係



年間の入場者は25万人を超え、2010年には国内で最も多くの観光客を集めた公園である。

この公園が特徴的なのは、その成り立ちがコスタリカ人の市民運動によって出来上がったという点である。この運動は、1968年にアメリカ人の投資家が、現在の公園の土地をコスタリカ人から買い取ったことに端を発した。この投資家は、この地区での観光開発を計画しており、買い取った土地に柵を張り巡らしたのだが、問題はこの柵を巡って起こった。それまでは、この地区

は8世帯が暮らすだけの比較的人口密度の低い地区であり、この地区内にあるビーチには誰でもアクセスする事ができたのだが、一帯が私有地となり、且つ柵が張られたことによって、地元のコスタリカ人たちがビーチへアクセスできなくなってしまった。そのことに反対する人々が市民団体を組織し、ビーチの開放運動を起こしたのであった(Monge, 2000)。運動は3年の歳月をかけて行われたが、最終的にはコスタリカ政府が介入し、一帯の土地を国が買い上げ公園として一般に開放することで決着した。こうして1972年に誕生したこの公園は、当初「レクレーション海岸マヌエルアントニオ国立公園」と名付けられた。当時は、公園内のビーチまで車で乗り入れることができ、週末は家族連れでにぎわっていたというが、その後、乗り入れる車の排気ガスやごみ問題が深刻になり、それを重く見た国立公園庁(当時)が公園のカテゴリーを変更し、より自然保護区としての機能を強化していく(Cordero and Duynen, 2002)。

現在、同公園は国内で2番目に小さい国立公園でありながら、109種類の哺乳類と184種類の鳥類の棲家となっており、保護区としての役割を果たしている⁵。しかし、この公園の歴史が現している通り、保護区としての性格が強まっていくのは、公園が出来た後の話であり、市民運動の目的や当時の公園の名称からも明らかのように、人々が希求していたのはレジャーのための公園であった。

3-2. 1980年代以降：自然科学者の働きかけによって作られた自然保護区

1980年代以降に作られた国立公園の例として、北西部のグアナカステ国立公園(Parque Nacional Guanacaste)が挙げられる。この地域は、稀少となっている熱帯乾燥林が繁殖している地域であるが、同時に森林伐採の影響を受けていた地域でもあった。1991年、その森林の保全と回復を目的に、国立公園設立に尽力したのがアメリカ人の生物学者ダニエル・ハント・ジャンセン氏であった。彼は、この森林を守るために資金集めのキャンペーンを行い、基金

を立ち上げる。それをもとにして保全活動が行われ、現在では熱帯乾燥林の他に、熱帯多雨林と熱帯雲霧林も回復している。また、各森林地帯を回廊として繋ぐ移行帯も作られ、植物相と生物相双方の回復が図られている。その後、グアナカステ国立公園とその一帯は、1999年にユネスコ世界自然遺産に認定される。一方で、これらの運動を主導してきたジャンセン氏は、コスタリカで生物多様性研究所を立ち上げ、その後コスタリカの自然保護に関わっている。

その他の例は、モンテベルデ雲霧林保護区(Reserva Biológica Bosque Nuboso Monteverde)がある。この地域が保護区になったきっかけは、アメリカ人の生物学者ジョージ・パウエル氏が、ゴールデン・トウド(Golden Toad)と呼ばれるこの地域にしか生息しないカエルの固有種を発見したことに始まる(現在は絶滅)。パウエルは、非政府組織(NGO)のコンサベーション・インターナショナルと世界自然保護基金(WWF)から融資を受けて基金を作り、それによって一帯の土地を買い上げ保護区にした(小林, 2002)。

これらの例の特徴は、保護区の立ち上げに自然科学者たちが携わったことと、彼らが調査者としてだけでなく運動家としての側面と実行力を持ち合わせていたことである。オーツによれば、このような実践者としての自然科学者の運動は、すでに1960年代から1970年代を通じて行われていた。当時の彼らの主要なフィールドはアフリカであり、稀少な動物の保護を目的に多くの自然保護区を作ることに尽力してきた。1970年代以降、アマゾンに代表されるような森林破壊が明るみになると、彼らの注目も中南米へと移っていった(オーツ, 2006)。同様に、この時期はコスタリカでも森林の後退が進んでいた。国家森林融資基金(FONAFIFO)の推計によれば1983年時点で国内の74%の森林が喪失し、国内でも森林伐採が深刻な社会問題として浮かび上がっていた時期でもあった⁶。こうした背景から、コスタリカは自然科学者たちのフィールドとなっていく。

こうした流れには、コスタリカ政府から

の働きかけもあった。1978年に、先行事例であったガラパゴスにてエコツーリズムの導入に寄与したリッグ・マックファーランド氏を招聘し、政府と研究者が連携を図りながら、観光を念頭に置いた保護区の研究が国内でも行われるようになる(真板, 2001)。

このように、1980年前後に始まった変化は、自然科学者や政府の取り組みによってもたらされた。彼らの働きによって、コスタリカ国内で自然そのものの価値が再発見され、国立公園化する際の素材となっていく。それに伴って、国立公園の性格も単に風景美やレジャーを求めるものから「自然を守るもの」へと変わっていったと言えるだろう。

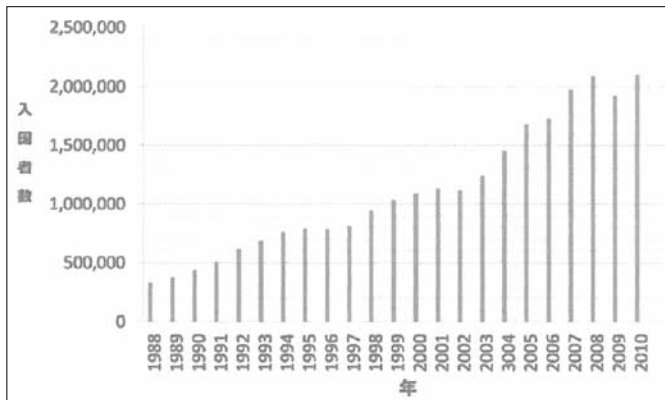
以上のように、コスタリカの国立公園の性格は、地元の人向けのレジャー目的から自然保護を目的としたものへ転換していく。しかし、性格が変わった国立公園をツーリズムの舞台に引き込むには、「保護区としての国立公園」を再びレジャーとして読み換えていく必要がある。その過程には、どのようなことがあったのだろうか。参考になる報告として、小林は、米国のメディアの動向について触れている。それによれば、1980年代から、自然科学者たちによって発見された中南米の特異な自然環境が、ドキュメンタリー番組として取り上げられ、米国で放映されることとなったという。こうしたメディアが中南米へ向かう人の流れを生み、現地ではこうした研究者たちを連れて秘境に入っていき小ビジネスが流行したという(小林, 2002)。これらの番組が製作された1980年代は、コスタリカの観光産業の萌芽期と重なる。マスメディアによって映し出されたコスタリカの自然は、当時増え続けていた自然保護区を「観光素材としての保護区」として観光の文脈に押し上げていくのに一役買ったと言えるだろう。

4. 政府観光局による環境評価

自然保護区が整備されていくのに呼応するように、1980年代以降、保護区を目的にした観光が勃興し始め、海外からの観光客

数は年々上昇していく（図-3）。観光客の大半は、北米と欧州出身者で、その割合は、北米が47%、欧州が14%を占めている⁷。

図-3 外国人観光客の入場者数の推移



（統計局のデータを参照し作成）

それに伴って、主要な国立公園周辺には、宿泊施設が立ち並ぶようになる。

こうした宿泊施設乱立時代に、コスタリカの観光に方向性を与えたのが政府観光局である。観光局は、1992年よりサステナブル・ツーリズム認定(Certificación para la Sostenibilidad Turística)とよばれる認定制度を設けている。環境と経済の持続可能な取り組みを行っている宿泊施設に、5段階で評価を与え、最高評価の宿泊施設には5つ星ならぬ「5つ葉」マークが与えられる。この認定は、全ての宿泊施設が対象になっているわけではなく、希望する宿泊施設が観光局へ申請を出し評価をされるという仕組みだ。2011年現在、5つ葉認定を受けた宿泊施設は19あり、それらは観光局のホームページで紹介されるなど、独自のPRの機会を受けることができる。高評価を受けている例としては、館内の発電を太陽光発電でまかなっている、提供される食事を有機農法で作った食材にこだわっている、宿泊施設が独自に自然保護区を保有し生態系の保護に貢献しているといった例が挙げられる。当初、サステナブル・ツーリズム認定は、宿泊施設に限定された認定であったが、現在ではその枠を、現地ツアーを催行するローカルオペレーターにも広げており、アクティビティの内容によって認定を行っている。

認定を受けている宿泊施設の特徴は、環境に配慮していることに加えて高価値・高価格ということだ。認定を受けている施設は宿泊費が高い傾向にあり、5つ葉マークの施設に限っては1泊200ドルを超えている。これらの高価格の宿泊施設は、外国資本によって経営されている場合が多いのも特徴だ。筆者が行った調査では、マヌエルアントニオ国立公園周辺には72軒の宿泊施設があるが、そのうちの約67

%が外国人によって経営されており、一泊100ドルを超える宿に限っては、その割合が83%に上昇することが分かった。この中には5つ葉マークの宿泊施設が3件含まれているが、同様に外国人による経営である。したがって、地域経済の振興を考えたときに観光のリーケージ効果が懸念されるだろう。また、同地区の5つ葉マークの宿泊施設は規模も大きい。1つは108の客室を持つ同地区で最も大きいホテルであり、他の2施設はそれぞれ61室と38室の客室を持ち、マスマーケットを対象としている傾向が伺える。

5. エコツーリズムを目的とした市民運動

これまで紹介してきたのは政府による取り組みであるが、政府とは一線を画したところでエコツーリズムを目的とした市民運動が行われている。

代表例としては、先ほども触れたモンテベルデ雲霧林保護区が挙げられる。元来この地域は、1948年に起こった朝鮮戦争の兵役を逃れるために米国からやってきたクエーカー教徒たちが入植し開拓した地域であった。彼らは、購入した土地のうち標高1000メートル以上の森林約550haを開拓せずに残し、それが後の保護区の中核部になっている。彼らは現在すでに米国へ帰国しているが、彼らが残した森林や英語教育が

後の観光業を担う人々の門戸を開いた(国本、2004)。同保護区は、国立公園ではなく民間のナショナルトラストによって運営されている自然保護区である。保護区の運営は、入場料やガイド料からまかなわれている。同時にそれらの売り上げの一部は、付近の学校への環境教育活動や植林活動にまわすなどの環境保全活動に利用される。こうした取り組みが喧伝され、モンテベルデ雲霧林保護区は年間入場者数が20万人を越える人気観光地へと成長している。

また別の例では、シレンシオ協同組合(Cooposilencio R.L.)がある。シレンシオは、1972年に土地を持たない貧しい農民たちが集団入植した新興農村で、住民で協同組合を組織している。組合では、村の産業を作るために、いくつかのプロジェクト(中心になっていのは、油ヤシ栽培と紙材用の木材生産)を立ち上げているのだが、その一部として観光振興も行っている。このプロジェクトは、環境保全と女性の雇用創出を目的に立ち上げられた。村の一部を保護区にして観光素材とすると共に、環境エネルギー通信省の許可を受け、傷ついた哺乳類と鳥類の保護を行っている(Cordero and Duynen, 2002)。特に、同地には絶滅が危惧されているコンゴウインコが生息しており、生息地の保全はこのプロジェクトの目的のひとつになっている。観光業も含めた村内で行われる全ての産業の収益は、全てシレンシオ協同組合に集積され、組合員の給与は組合から平等に分配される仕組みになっている。因みに、同組合は地域経済の振興の目的で、独自の地域通貨を発行しているのだが、組合から分配される村民の給与も半分は地域通貨で支給されている。彼らの自然保護活動や地域経済の自立へ向けた活動は、ロンリープラネットなどのガイドブックにも取り上げられ、エコツーリズムを実践する人々として描かれている。

6. 太平洋北部沿岸部のリゾート開発

ここまで、コスタリカの「エコツーリズム」のイメージを支えてきた取り組みを解説してきたが、次に、近年行われている新たな観光開発の動きを紹介したい。これは、

サン・アンド・サンドをコンセプトにしたビーチリゾート開発で、コスタリカ北部の太平洋沿岸にあるパパガジョ湾(Golfo de Papagayo)で起こっている。この地域で調査を行ったハニーらのグループによれば、この開発の流れを次のように解説している。1995年にホセ・フィゲレス大統領(当時)は、カンクンのようなリゾート地にするという触れ込みのもと、パパガジョ湾一帯に30億ドル規模の巨大リゾート開発計画を持ち上げる。リゾートホテルや別荘地、ショッピングセンターやゴルフ場などの複合リゾートの建設計画で、完成すれば25000～30000室の客室を有する中央アメリカで最大のリゾート地となる計画であり、世界から出資者を募っていた。計画は、同地域から約30キロ離れたリベリア(Liberia)という町の空港を国際空港化させるプロジェクトと同時に進行しており、空港を国際化させ新興観光地を誘致するというシナリオであった。2002年にデルタ航空がアメリカ本土からの直行便を就航させたことをきっかけに、堰を切ったように投資が行われるようになる。2008年のリーマンショック以前には、12以上の国際線のキャリアがアメリカやカナダ、ドイツなどから就航し、パパガジョ湾一帯はコスタリカの新たな観光地として急成長したのであった(Honey, 2008)。

また、ハニーらによる後続調査によれば、リベリアの空港利用者の9割がこのビーチリゾートを目的地にやってくるおり、彼らは、首都のサンホセの空港利用者に比べてのエコツアーへの関心が薄いという。これらのデータから、ハニーらは現在のコスタリカの観光傾向は、エコツアーを目的に来る層と、リゾートホテルを目的に来る層に二分されていると分析している(Honey et al.2010)。また、現在、コスタリカ政府は南部にあるパルマル・スールという町の空港も国際化する計画を立てており、パパガジョ湾に続く第二のビーチリゾート開発を計画しており、こうした動きが近年活発になっているのである。

ハニーらがこれらの開発を批判しているのは、第一にホテル建設時にパパガジョ湾

内の水質汚染が問題になったことだ。この問題は、法律で建築が禁止されている区域(海岸線から200メートル以内)にホテルが建築されたことに起因している。第二には、コスタリカがこれまで築いてきたイメージに関するもので、環境問題も含め、大規模な観光開発は「コスタリカのエコツーリズム・イメージを汚すもの」だと批判している(Honey, 2008)。そもそも、エコツーリズムはこうした大規模な開発のオルタナティブとして生まれたものであり、現在の状況は時代に逆行しているという主張だ。

7. 結論

コスタリカ北部の太平洋沿岸で起こっている観光開発が批判される時、ツーリズムのイメージが引き合いに出されるのは、「エコツーリズム」というイメージが、同国の観光にとって重要な役割を果たしてきたからである。しかし一方で、序論でも述べたように、この「エコツーリズム」という言葉は、非常に抽象的に使われている言葉でもある。そこで、近年の大型リゾート開発を「エコツーリズム」と二分して論じるならば、これまでコスタリカで「エコツーリズム」と呼ばれてきたものを再検討する必要があるのではないかと、というのが本稿の趣旨であった。

そこで、本稿の前半では、コスタリカの「エコツーリズム」として紹介されることの多い3つの取り組みを取り上げた。そこから言えることは、以下の点である。

「自然保護に熱心な国」イメージを作ったという点では、国内の26.21%を占める保護区の存在は非常に大きなものであろう。国立公園は1950年代から作られ始めた歴史を持つが、生態系の保護が重視されるようになるのは、1980代に入ってからである。つまり、「保護区としての国立公園」はある時期に創られたものであり、その性格や目的は時代とともに変容しているということだ。

また、宿泊施設の形態に目を向ければ、従来からサスティナブル・ツーリズム認定を受けている施設でも大型のものもあるし、それが主に外国資本によって担われている

点で、地域経済への持続可能性に疑問符が付く状況もある。さらに、大型リゾート開発を行う過程で環境汚染の問題が発生しているが、しかしこうした問題は、サスティナブル・ツーリズム認定を受けたホテルが並ぶ地域でも起こっていると指摘されている。例えば、ある観光地のホテル街から出た汚水がそのまま海に流れ出ているといった事例が報告されている[Koens et al.: 2009]。もちろん、特定のホテルが原因を作っているわけでもなく、認定を受けたホテルも含めたホテル街のインフラの問題である。地域差や問題の質の違いはあるにせよ、これらの環境問題は新興開発地域でのみ起こっている問題ではないのだ。

2000年代に入って、新たな観光地として台頭してきたパパガジョ地区は、従来のコスタリカが築いてきたイメージと相反するものとして捉えられている。しかし、従来の「エコツーリズム」と一括りにされてきた事象の中にも、実は同様の問題点を抱えている事がわかった。結論として言えるのは、新たに起こった開発の流れは、大型リゾート開発と「エコツーリズム」という棲み分けで整理できるものではないということだ。双方はいくつかの点で共通しており、グラデーションのように繋がっている。

これまでのコスタリカの観光は、良くも悪くも「エコツーリズム」というイメージに縛られてきた。現在、北部の太平洋沿岸で起こっている観光開発は、まさにイメージと実態のギャップという点から語られてきた。今後、求められていくのは、「エコツーリズム」というイメージの呪縛から抜け出し、実情を見つめていく視点だろう。

謝辞

筆者は青年海外隊員としてコスタリカ共和国に滞在する機会を得た。本稿に関する調査と協力隊員としての活動は直接関係はないが、同国で得た知見は本稿に大きく反映されている。同国での活動機会を与えてくださった独立行政法人国際協力機構及び同コスタリカ支所の皆様にこの場を借りて感謝を申し上げます。

参考文献

- Aylward, B., Allen, K., Echeverria, J., and Tosi, J. "Sustainable ecotourism in Costa Rica: the Monteverde Cloud Forest Preserve." *Biodiversity and Conservation*, vol.5, 1996, p.315-343.
- Cordero, A. y Duynen, L., "¿Turismo sostenible en Costa Rica? El caso de Quepos-Manuel Antonio" . *Cuaderno de Ciencias Sociales*, vol. 123, 2002, p.68-69,80-81.
- Honey, M. *Ecotourism and Sustainable Development. Who owns paradise?* 2nd edition, Island Press, Washington, DC, 2008.
- Honey, M. Vargas, E and Durham, A.H. *Impact of tourism related development on the pacific coast of Costa Rica*. Center for responsible Travel. Stanford university and Washington, DC, 2010, p.32-47
- Koens, J., C. Dieperink, and M. Miranda, "Ecotourism as a Development Strategy: Experiences from Costa Rica." *Environment, Development, and Sustainability*, vol.11, 2009, p.1225-1237.
- Monge, O., *La real historia de Quepos*. Rodrigo Hidalgo del Valle S.A. San José, 2000, p.161-166.
- Rivera J., "Assessing a Voluntary Environmental Initiative in the Developing World: The Costa Rican Certification for Sustainable Tourism" . *Policy Science*, vol.35, 2002.
- Stem, C., Lassoie, J., Lee, D., Deshler, D. "How 'eco' is ecotourism? A comparative case study of ecotourism in Costa Rica", *Journal of Sustainable Tourism*, vol. 11 (4), 2003, p 332-347
- オーツ, ジョン・F (訳: 浦本昌紀) 『自然保護の神話と現実』 緑風出版、2006
- 小林寛子 『エコツーリズムってなに? フレーザー島から始まった挑戦』 河出書房新社、2002、139-141頁
- 国本伊代 「モンテベルデ自然保護区—アメリカ人クエーカー信徒がつくりあげた自然保護区」 『コスタリカを知るための55章』 明石書店、2004、216頁
- 敷田麻美、森重昌之 「観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性」 『国立民族学博物館調査報告』、23号、2001、83-100頁
- 真板昭夫 「エコツーリズムの定義と概念形成をめぐる史的考察」 『国立民族学博物館調査報告』、23号、2001、15-40頁
-
1. Instituto Costarricense de Turismo (政府観光局) [http://www.visitcostarica.com/ict/backoffice/treeDoc/files/Anuario%20de%20Turismo%202006%20\(VERSION%20FINAL\).pdf](http://www.visitcostarica.com/ict/backoffice/treeDoc/files/Anuario%20de%20Turismo%202006%20(VERSION%20FINAL).pdf)
 2. National Geographic Travel Magazine <http://traveler.nationalgeographic.com/2009/11/destinations-rated/central-and-south-america-text/6>
 3. Grupos Étnicos Indígenas Centroamericanos (中米先住民族研究センター) <http://www.una.ac.cr/bibliotecologia/grupos-etnicos/indigenascr.htm>
 4. Sistema Nacional de Áreas de Conservación (国家自然保護区庁) <http://www.sinac.go.cr/planificacionasp.php>
 5. Sistema Nacional de Áreas de Conservación (国家自然保護区庁) http://www.sinac.go.cr/acopac_manuelantonio_general.php
 6. Fondo Nacional de Financiamiento Forestal (国家森林融資基金) <http://www.fonaffo.com/>
 7. Instituto Costarricense de Turismo (政府観光局) <http://www.bncr.fi.cr/bn/turismo/dowlands/BNCR%20-%20Anuario%20de%20Turismo%202008.pdf>